

## エペソ人への手紙2章1-10節 「恵み：神のゲームチェンジャー」

### 1A 背きと罪の中で死んだ者 1-3

1B 世の霊に従う1-2

2B 怒りの子 3

### 2A 憐れみ豊かな神 4-7

1B 生かされた方 4-5

2B 着座させてくださった方 6-7

### 3A 恵みのゆえの救い 8-10

1B 一方的な神の賜物 8-9

2B 神の作品 10

## 本文

エペソ人への手紙 2 章を開いてください。今朝は、2 章 1-10 節を一節ずつ見ていきたいと思えます。週報を見て、少し説教題に驚かれたかもしれません。「恵み：神のゲームチェンジャー」というものです。

ちょっと驚かせますと、おそらく同じ時間に、カルバリーチャペル沖縄の牧者、リックさんが、同じ言葉を使って説教をしているはず。一昨日、私が今朝の説教の準備をしていると、メッセージで連絡がありました。「日本語で、game changer ってなんていうの？」と言いますから、私が答えました。実は、この英語、すでにカタカナでそのまま使われるようになっているんだ、ということをお伝えしました。こんな意味です。「この言葉は元々 スポーツ分野の言葉とされています。特に野球において、試合の流れを一気に変えてしまう選手のことを指す言葉でした。これが転じて、動向を大きく変える人や出来事をゲーム・チェンジャーと言うようになりました。」<sup>1</sup>例えば、私たちの生活に、携帯電話が導入された時は、大きく生活が変わりましたね。初めは、歩きながら独り言を言っている人たちが信じられませんでしたね。そもそも、無線で電話がつながっていること自体が、驚きでした。この言葉は、軍事用語としても使われていますが、今の言葉の説明は防衛省からのものです。戦争におけるゲームチェンジャーとなる兵器は何か？なんていう言い方をします。

それで、なんでこんな質問をリックさんが僕にしたのか？と言いますと、なんと「神の恵みを説明するため」ということです！僕も、明後日もメッセージは、神の恵みですべてが変えられる話をするはずなんだ！と言って、「このアイデア、盗用するわ！」と笑いながら伝えました。そうなんです、パウロは、神の恵みが私たちを、すべてを何もかも変えてしまったことを教えています。それが、今朝の主な内容です。

<sup>1</sup>[https://www.mod.go.jp/asdf/meguro/center/img/04\\_symposium1.pdf](https://www.mod.go.jp/asdf/meguro/center/img/04_symposium1.pdf)

### 1A 背きと罪の中で死んだ者 1-3

前回、私たちは、パウロの祈りの中で、「1:19 神の大能の力の働きによって私たちに信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように。」とありました。そして、この力をキリストに神は働かせて、この方がよみがえらせ、まさに、あらゆる名にまさる名を与え、神の右の座に着かせてくださったと言っていました。これほどの力を、神はご自身の恵みによって働かせるのです。全く、好かれるようなことはない、愛されるべきものがない、むしろ憎まれ、捨てられ、怒りを受けるような者に、とてつもなく良くしてくださるのです。いかに、神が恵みによって、その力を働かせるかを見ていきましょう。

### 1B 世の霊に従う1-2

<sup>1</sup> さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、<sup>2</sup> かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。

神の恵みの麗しさ、すばらしさを知る時に、それが麗しく、すばらしいことが分かるためには、自分が以前、どれほどのものだったかを知る必要があります。これを、ある人は、ダイヤモンドの輝きを見せるためには、黒の背景がいいと言っていました。それと同じで、私たちの過去がどれだけ絶望的で、闇の中にあっただのかを、パウロは示しています。

「あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者」だということです。あなたは、死んでいました、と、はっきりと言っています。あなたは、弱かったのだ。あなたは惨めだったのだ、ではなく、あなたは、もう死んでいました、と言っているのです。アメリカから戻って来て間もなくして私たちが自宅から教会を始めようとして、近所にトラクト(gospel tract)を配りました。近くに、友達になった牧師さんの教会があります。そこでも、私たちと似たような形のトラクトを作成し、駅前などで配っていました。その題名がすごかった。「あなたは罪人です、死ぬべき罪人です」というものです。あまりにも直球すぎるので、正直、びびりました。案の定、怒りの電話を受けたそうです。けれども、パウロがここで言っているのは、そういうことです。背きと罪の中で死んでいます。

背きというのは、一線を越えたという意味で、罪は的を外したという意味です。背きは、もっと違反していることに近い意味で、罪は失敗したという意味が強いです。いずれにしても、アダムが罪を犯して、神から引き離されて以来、人は生まれながら罪を持っており、それで神から離れています。「死」というのは、離別を意味します。魂が肉体から離れると、死ぬと言いますね。同じように、自分の意識が神から離れているなら、肉体は生きていても、霊的には死んでいるのです。

そして、罪の中に生きている時に、「この世の流れに従」っているとあります。ここでの「従う」は、意識的に従うのではなく、なんとなくついていっている、という意味です。流れにただ乗っているよ

うな状態です。チャック・スミスのお母さんが、彼がまだ幼い頃、こうやって世の流れについて教えてくれたようです。「流れに逆らっている魚のみが生きているのよ。」そうですね、生きているからこそ上流に向かって泳いでいる魚がいますね。死んだら、そのまま川の流れに従っているように、人は、罪の中で霊的に死んでいる時には、世の流れに何となくついて行っているだけなのです。

そして、その世を支配しているのがサタン、悪魔です。悪魔が、「この世の神」と聖書で呼ばれています(Ⅱコリ 4:4)。「世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちは知っています。」と使徒ヨハネは言いました(Ⅰヨハ 5:19)。パウロは、悪魔を「空中の権威を持つ支配者」と呼んでいます。前回の学びで、イエス様がよみがえられた後に、天上で神の右の座に着かれますが、その時に、「1:21 すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。」と言っていましたね。これらの支配、権威、権力、主権という中に、サタンが支配者としているということです。そして、なぜ「空中」と呼んでいるかというと、神の御座がある天からは、追い出されているからです。御座のある天にも、また地上にも近づくことのできる中間の天を、「空中」と呼んでいると思われれます。

エペソの町が、偶像礼拝が多く、魔術も盛んに行われていたという説明を思い出してください。ですから、私たちの生活以上に、エペソの人々にとっては霊の存在は身近でありました。そして、その悪の力は生々しいものであったでしょう。しかし、魔術のようなものでなくとも、私たちの生活で、このことでイエスを信じ、従わせなくさせているもの。また、信じて、そこから離れていくようにさせていくものがあるならば、そこには霊的な影響があると考えてよいです。サタンが、何とかして人々が信仰に至るのを妨げるし、また信仰から離れることを、そそのかします。

そしてサタンは、「不従順の子らの中に今も働いている霊」であるとパウロは言っています。不従順の子というのは、神を信じない、神に従わない人たちということです。彼らは、神に従うなど奴隷のようになりたくないと思っているのですが、実は、悪魔の虜にされていることは気づきません。

## 2B 怒りの子 3

<sup>3</sup> 私たちもみな、不従順の子らの中にあつて、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

1 節では、「あなたがたは」と言っていますが、ここでは、「私たちもみな」と言っています。これは、おそらく異邦人であるエペソの信者たちが、あなたがた、であり、ユダヤ人またユダヤ教に改宗している人々のことを「私たちもみな」と言っているのかもしれませんが。パウロたちユダヤ人は、異教の儀式の深みや、悪霊の強い影響下にいたわけではありません。けれども、肉の欲に対しては、律法は何の効力も発揮しないことを、律法に熱心であったパウロこそが、良く分かっていました。どんなに真面目に律法に従っているように見える人でも、例えば金持ちの青年は、お金の欲

から離れることができていませんでした。「自分の肉の欲のままに生」きていたのです。キリストを信じて御霊が与えられて、御霊に導かれることによって、肉の行いを殺すことができます。

だから、「ほかの人たちと同じ」なのです。どんなに自分が正しく見えても、あからさまに罪を犯している者と同じように罪深いのです。それで、「生まれながら御怒りを受けるべき子らでした」と言っています。罪は、アダムが罪を犯した時以来、すべての人に広がりました。罪の性質を生まれながら持っています。「嘘をつきなさい」と親から教えられなくても、嘘をつきます。

そして、神は、罪を犯した者に対して正しく裁かれる方です。怒りとは、感情による怒りの爆発ではありません。裁判官が、罪に対して刑を下す時の怒りです。私たちは、何から救われるのか？をよく考える必要があります。聖書には、罪から救われるためであるとあります。それだけでなく、罪に対する神の怒りから救われる、ということを知る必要があります。「ロマ 5:9 ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。」

## **2A 憐れみ豊かな神 4-7**

いかがでしょうか？罪の中に死んでいて、世の支配者の霊についていくままになっていて、肉の欲のままに生き、そして御怒りを受ける子たちなのだとということです。しかも、生まれつき、です。けれども、4 節は「しかし」という接続詞から始まります。聖書に「しかし」が出てきたら注目です。主が、ゲームチャンジャーとなられます。主の恵みが全てを変えます。

### **1B 生かされた方 4-5**

<sup>4</sup> しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、<sup>5</sup> 背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。

私たちの神が、「あわれみ豊かな神」であることを知る必要があります。これから、主は数々の、良きことを私たちにしてくださいます。それが、私たちが何かしたからではなく、むしろ、罪の中で死んでいて、この世の流れに従って、不従順の霊に従って歩いて、肉の欲のままに生き、生まれつき御怒りを受けるべき子らなのです。そのような者たちにどうして、良くして下さるのでしょうか？ロマ 5 章では、良い人のためにはもしかしたら、だれか代わりに死ぬかもしれないが、罪人であった時に、キリストを死に渡されたところに、神の愛があることを教えています。神の恵みは、神のご性質によるのです。ここが大事です。神の恵みは、私たちがどうだとかは全く関係なく、ただ憐れんでくださる神のご性質に拠るのです。

これが理解できると、私たちは神ご自身の行動を理解することができます。イスラエルは、神に

背き続けました。初めから背きました。モーセがシナイ山で律法を受け取っている時に、さっそく、ふもとで金の子牛を造り、戯れて乱れていました。主は、そのことを見過ごされました。なぜか？モーセに、ご自身の御名の栄光を現わします。「出 34:6-7 【主】は彼の前を通り過ぎるとき、こう宣言された。「【主】は、あわれみ深く、情け深い神。怒るのに遅く、恵みとまことに富み、7 恵みを千代まで保ち、咎と背きと罪を赦す。しかし、罰すべき者を必ず罰して、父の咎を子に、さらに子の子に、三代、四代に報いる者である。」

罪や背きに対して、イスラエルはすぐにも滅びなければいけなかったのに、それでも生き延びています。そこには、主が忍耐されて、彼らが立ち返るのであれば、すべての罪を赦される憐れみ深い方だからです。そして、イエス様が放蕩息子の喩えで、父親が、汚くなっている息子を接吻しました。「ルカ 15:20 こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとへ向かった。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。」着ているものをきれいにしてから、父が息子を受け入れたのではなく、まだ汚い時に、それで駆け寄って首を抱き、口づけしているのです。神は、そのままのあなたを受け入れられるのです。

そして、「私たちが愛してくださったその大きな愛」とあります。愛されるようなものが何一つなくとも、いや憎まれるようなもの、見捨てられて、忌み嫌われるものが満ちているのに、それでも愛する愛です。使徒ヨハネは第一の手紙で言いました、「Iヨハ 4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちが愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」私たちが愛したからではなく、まず神が愛されたのです。神の愛がまずあるから、私たちは愛します。

そして、「背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。」と言っています。主は、ラザロを死んで四日経っていたのに、それでもよみがえらせました。このように、神は死んだ者をよみがえらせる力があります。その全能の力を、キリストにまず働かせて、この方をよみがえらせました。そして、信じる者は、背きの中で死んでいても、それでもキリストと共に生かしてくださいます。「ロマ 6:4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。」

そしてパウロは、思わず、「あなたがたが救われたのは恵みによるのです。」と言っています。あとで、じっくりと、恵みによって救われているのであり、行いによるのではないことを語ります。本当は、御怒りを受けなければいけないのに、神は、そこから救われて、生かしてくださいましたのです。

## 2B 着座させてくださった方 6-7

<sup>6</sup> 神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてください

ました。

この箇所は驚くべきことです。よみがえらせただけでなく、「ともに天上に座らせてくださいました。」ということです！他の箇所では、今、引用したロマ書のように、共に生かして下さったところまでは書いています。けれども、ともに天上に座らせて下さったというのは、ここエペソ人への手紙だけではないでしょうか。

ここで大事なのは、「キリスト・イエスにあって」であります。1章20節で、「キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて」とありました。この方の内にいるので、私たちも同じように新しいいのちが与えられ、また天に着いているようにされている、ということです。もちろん、私たちのからだは地上にあります。けれども、霊的に、キリストの内にいるのであれば、キリストがおられるところに私たちも結ばれている、つながっているということです。私たちはもはや、地に属しているのではなく、天に属しています。そして、主が天から降りて来られる時には、私たちも引き上げられて、将来は、復活の体、栄光の体で、主が座すところに私たちも居させていただくようになります。

ですから、私たちは、諸々の霊どもに対して、悪魔に対しても勝利しているということです。1章20-21節でみてのとおり、すべての支配や権威、主権の上に、今の世だけでなく、次に来る世においても、すべての名の上にその御名を置かれました。すべてのものを足台としておられます。ですから、私たちもこの方において、勝利しています。「Iヨハ5:4-5 神から生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。5世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。」ですから、恐れることはあません。同じヨハネ第一には、「4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。」とあります。

<sup>7</sup> それは、キリスト・イエスにあって私たちに与えられた慈愛によって、この限りなく豊かな恵みを、来たるべき世々に示すためでした。

いかがでしょうか？ここまで、主が私たちにしてくださることは、とてつもない慈愛です。キリスト・イエスにあって私たちに与えられた慈愛です。

そして、恵みというのが限りがないとパウロは言っています。死んでいたのに、よみがえらせ、天の処に座らせてくださいました。非常に優れた恵みは、なんと、「来たるべき世々に示す」と言っています。ここの「世々」とは、今の世がなくなって、また次の世、時代が来て、また違う世が来てと、要は永遠の世界のことを意味しています。神の限りない豊かな恵みを示すのに、永遠を費やさないといけないうことなのです！

伝道者の書に、「神はまた、人の心に永遠を与えられた。(3:11)」とあります。みなさん、それぞれ永遠を思う時が、おありだと思います。私が小学生の時に、ふと思ったことです。自分がお母さんのおなかから生まれたけれども、その前にずっと時間があつたのに、自分は何の意識もせず、存在していなかった。ということは、死んだ後も同じように存在しなくなり、意識もなにもなくなってしまふということだ。永遠にそうなるということだ、ということです。限りなく空しく、恐ろしくなりました。

しかし、エペソ書はそこに完全な解決を与えてくれます。神は、世界の基が置かれる前から、キリストにあって自分を選んでくださいました。そして、その慈愛によって、ご自分の恵みを世々に渡って示されるのです。神の永遠の愛に包まれているのだということを知ります。パウロが祈っていましたね、聖徒たちが神の資産であることがどれほど栄光に富んだものか、知ることができるようにと祈りました(1:17)。これほど、尊く、みなしておられるのです。

### **3A 恵みのゆえの救い 8-10**

そしてパウロは、改めて、これがみな、神の恵みであって、私たちの行いが入り込む余地がないのだということを強調します。

#### **1B 一方的な神の賜物 8-9**

<sup>8</sup> この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。

これは、とても良い訳です。新改訳の第三版は、「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。」となっています。そうではなく、パウロが強調しているのは、「この恵みのゆえに」なのです。英語ですと、NIV では”it is by grace you have been saved, through faith”となっています。恵みのゆえに、救われたのです。神がその一方的な好意によって、全能の力を働かせて救われました。これをパウロは、最も伝えたいと思っていることです。信仰によって救われたのは、その通りで、エペソの人たちも分かっています。しかし、この偉大な恵みがあって、神が私たちを救われたのであって、私たちはただ、信じるという手段をもってそれを受け取りました。

それで、パウロは、救いは、自分から出たものではないのだよ、と教えます。神の賜物であって、自分が何かしたからではないのだ、と教えるのです。自分が信じていて、他の人が信じていなくて、それで自分には、何か性格があって、それで神を信じやすいものがあつたのだとかいうものではないのです。または、こんな心が弱っていた時期があつて、それで神にすがったから、とかいうものでもないのです。今、信じている人々を眺めてみてください。疑い深い人もいるでしょう。神は鼻っから信じなかつた人もいるし、誰に祈っているのか分からないけれども、毎日、熱心に祈っていたという人もいるでしょう。自分の傾向や性格など、何の関係もないのです。そして、自分の心が弱っているといつても、弱っている人で救われていない人は大勢います。自分が何かあるから、と

いう発想自体が間違っているのです！

救いについては、神が恵みによって行われているものであり、私たちのうちから出たものではないのです。ただ神側にしか理由がないのです。神が憐れんで、救って下さり、それで私たちがこのように集まっているのです！

<sup>9</sup> 行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです。

こういう「誇ることのないためです」という言葉を、日本人が聞くと、「ああ、誇ってはいけないのだ」となります。そのこと自体が、自分の努力、行いだということに気づきませんか？そうではなく、自分がやったのではないとはっきり分かっているからこそ、誇りようがないのです。「私は、自分のことを威張っていない。むしろ卑下している。そうやって、高慢にならないようにしましょう。」ではないのです！「ちょっと待って！何で、神がこんなにも良くてくださるのですか？なぜ、こんなどうしようもない私に、神さま、こよなく愛してくださっているんですか？すごすぎます！」こうやって、神の恵みをほめたたえているから、誇ることがないのです。神の栄光は、恵みの栄光なのです。

## 2B 神の作品 10

<sup>10</sup> 実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。

これが、キリスト者が今を生きる姿です。神がご自分の恵みによって、救われました。神がご自分で、キリストにあって新しい人にする、ご自分の作品なのです。これは、ポエマ(ποίημα)というギリシア語です。英語のポエムはこのギリシア語から来ています。神が、芸術家として、ご自身の願っている作品を造っているのです。この神の思い入れの中心に、みなさん一人一人がいるのです。このようにして、一人ひとりがキリスト・イエスにあって新しく造られたのです。

そして、「良い行いをするために・・・造られた」とありますね。救われることが、何か罰を受けなくて済んだとしかとらえなければ、元も子もありません。天国に行く切符をもらったから、あとは地上で何をしても構わない、というのではありあません。キリスト・イエスにあって造られた、とあるように、私たちが、キリストにあって神に似た者となるように造られたのです。神が良いお方であるように、神が良い働きをされているように、キリストにあって私たちも良い行いをするように造られました。行いによって救われたものではありません。けれども、良い行いをするために救われました。

しかし、神はその良い行いをも、予め備えられたのです。私たちが良い行いをするのは、神の恵みが私たちの内に働き、主ご自身が私たちを通して現れて下さるためです。私たちの良い行いではないのです。主のお働きが、私たちを通して現れるのです。私たちが、この方のみこころに身を



ゆだねることによって、良い行いが現れるのです。このようにして、すべて神から始まり、神によって成り立ち、神に至るのです。

キリスト教会において絶えず挑戦を受けるのは、何とかして自分たちに原因を持ってこようとすることです。自分たちが何かをしたから、神が応じてくださったとしたいのです。その逆であることに気づきましょう。神がこれだけ良いことをしてくださったから、私たちが応答します。神の恵みがあるから、私たちはそれを受け入れて、良い行いとして応答するのです。私たちが何かをするから、神が応答されるのではないのです。主が、これほどの絶大な恵みをもって救われたのだから、その召しに応じて良い行いに励みます。このようにして、神がご自分の作品を私たちの内に形造られています。私たちを見たら、神がどれほどのことをされたのかを見ることができます。私たちは、ただ主をほめたたえることしかできません。感謝することしかできません。そして、その恵みに応答して、自分自身を神に献げるのです。